

研究テーマ選びにおける困難点

佐々木 嘉則

詳細目次

1. はじめに
2. テーマ選びにおける困難点
3. 問題意識を深めるために
4. リサーチインタレストと研究のスタンス
5. 「失敗」経験を伝える意義

6. 結語

稿末注

参考文献

研究テーマ選びにおける困難点

佐々木 嘉則

1. はじめに

本号に収録した「リサーチクエスチョンを軸とした実験的習得研究の進め方」は、本稿筆者がお茶の水女子大学の博士前期(修士)課程で担当する1年生向け科目「応用心理言語学特論」の一環として向山陽子氏に依頼したプレゼンテーション(2006年5月25日)にもとづく。向山氏は2001年の4月に同大学博士前期(修士)課程日本語教育コースに入学して2年後に明示的文法指導の教授効果に関する修士論文を提出し、現在は応用日本言語論講座(博士後期課程)に在籍している。このプレゼンテーションは、同氏が大学院入試に出願した当時から修士論文を書き上げその成果が学術誌に掲載されるまでの経緯と、その間「研究」という営為について得た様々な気づきや学びを率直に語っていただいたものである。

その中に収められている「図1 研究の計画・実施・論文完成までの流れーリサーチクエスチョンの立て方・修正の仕方ー」は、リサーチインタレストの設定から研究計画の立案・実施(データ分析)を経て考察に至るまでの一連の流れを示したフローチャートであり、若手研究者が現在の自分の立ち位置を確認するうえで便利このうえないロードマップとなっている。向山氏のプレゼンテーションはほぼこのフローチャートに沿う形で進められているが、とりわけリサーチインタレストからリサーチクエスチョンの設定に至る過程は研究計画立案の最初の関門ともいえる。「適切な問いをたてられる」こと、すなわち自分の研究活動の舵取りができることは独立した研究者に不可欠の資質であり、この能力を欠いてはいかにに統計学やコンピューター等の機器操作に長けていたとしても有意義な研究プログラムを自分の判断に基づいて進めることはできないからである。したがって、「いかに問うか」について省察を促すことは研究者養成の上で最も重要なステップの一つであるともいえよう¹⁾。

本稿では主にこの部分に焦点をあてていくつかの

経験則を紹介し、向山氏の所論とあわせて読者の参考に供したい。以下で「研究テーマ」と称するのは、向山氏のいう「リサーチインタレスト」にほぼ相当するとお考えいただきたい。

2. テーマ選びにおける困難点

向山氏は冒頭近くで次のように述べている。

どのような研究をするのかなかなか決められない人がいます。この間は「敬語について研究したい」と言っていたはずなのに、次に話したときは「動機付けに興味が出てきた」と言い、さらには「やっぱり作文にする」と言ってみたりと、RQに辿り着かないどころか、リサーチインタレストさえ絞り込めない人です。そういう人は一つのテーマの表層をちょっとかすってみただけで、「自分には難しすぎて研究できない」と諦めてしまったり、他の人がやっていることの方が面白そうに感じて自分もその領域に変えたり、といった繰り返しが多いように思います。

このような事例は思いのほか多い。これは修士論文執筆中に院生が陥りやすい典型的なつまづき(「修論症候群」)の一つである。

症名	メリーゴーラウンド
典型的な発病／発現時期	テーマ選び～リサーチクエスチョンの設定
症状	堂々巡りの考えを何度も繰り返し、いつまでたってもそこから抜け出せない。たとえば、自分の研究興味から研究遂行可能なリサーチクエスチョンにつなげることができず、「ああでもない、こうでもない」が延々と続く。

観察してみると、この症候の背景には以下のとおりいくつかの類型がみられるようである。

症名	青い鳥
典型的な発病／発現時期	領域設定～テーマ選び
症状	自分の現在の研究領域やテーマがつまらないものに思え、次に移る。しかしそれも長続きせず、同じことを何度も繰り返す。

行動パターンだけからはこれと似ているように見えるが、次の症候のほうが自覚症状はずっと重い。

症名	「ここはどこ？私は誰？」
典型的な発病／発現時期	領域設定～テーマ選び
症状	「私は何をするためにここにいるのだろうか？」という自分探しの彷徨(soul-searching journey)を延々と続ける。よってテーマが確定しない。

こういう状況が続くと次第に焦りが生じて、とにかく論文を出すことが自己目的化し、次のような症状に陥りやすい。

症名	失夢症
典型的な発病／発現時期	主にテーマ選びの段階以降
症状	締め切りに間に合うよう書き易いテーマで無難な論文をまとめることに気をとられるあまり、もともと大学院を志した当初の目的からどんどん乖離してしまう。そのうち、何のために大学院にいるのか自分でもわからなくなる。

このように「とにかく修論と名のつくものを出せばいい」という開き直った態度で臨んだ学生が結

果的には比較的すんなりと修士号を終える場合もある。しかし逆に、本人が心から納得できる動機に根ざしたテーマ選びでないと多少の困難に遭遇しただけで他のテーマに移りてしまい、結局遠回りを重ねることもしばしば見うけられる行動パターンである。

症名	晴天の霹靂
典型的な発病／発現時期	テーマ選び～研究計画立案
症状	突如としてそれまでと全く違う研究計画を持ち出す。多くの場合、「前のプランはうまくいきそうにないから」というのが理由である。(かといって、新しいプランがうまくいくという見通しもない場合が多い。)

こういう事態を避ける予防策の一つは、早いうちに先行研究の追試やパイロット研究をおこなうなどして方法論上の難所を把握しておくことである。そういう準備がないまま懷手で考えているだけでは、ただただ時間だけが無為に過ぎ去ることになりかねない。

症名	白昼夢
典型的な発病／発現時期	テーマ選び～リサーチクエスションの設定
症状	現場の実地見聞や研究方法の試行などを全く行わず、懷手をしたまま延々と考え続けるが、結局まとまらない。

3. 問題意識を深めるために

それとともにより根本的な問題として、多少の困難を排してでも研究をやりとげるだけの意欲を保ち続けられるような論題をとりあげることが重要なのは当然である。向山氏の場合は自らの教授実践経験に根ざした切実感のある、しかも理論的にも深く追求する価値のある問題意識(「暗示的指導はどの学習者に対してでも等しく効果があるのか?」)が根底にあったのでそれ以降の研究活動の軸がぶれること

がなく、M1 の間に修論データを収集し終えるという厳しいスケジュールで研究を遂行することも可能であったのだと推察される。

逆にそういう根の深い問題意識を欠いていると、研究を続けるにつれて行き詰まりに陥りやすい。特に言語習得論のように、人間の認知という目に見えない精妙なシステムに直結した分野の場合、その傾向が著しいようである。既に明確な問題意識を持ち合わせているなら、それを具体的な研究計画に移すためにどのような理論枠組みや方法論を援用すればよいかを探るべく、本や論文を読んだり、授業や講演に出たり、あるいは専門家に相談したりするのが次のステップとなる。一方、そういう確たる問題意識がまだ突き詰められていない場合、このような「勉強」を地道に進めるとは並んでリサーチインタレストや研究動機の深化を図る意識的な努力も必要となる。

そのための方策として、四六時中メモ帳を持ち歩き、およそ何かの研究のタネとなりそうなアイデアや気づきがあれば片端から記録しておくことを学生諸氏に勧めている(当分なら自分あてに携帯メールを送ってメモ代わりにすることも可能だろう)。書いている時はとりとめもない思いつきの羅列のように感じられても、おりにふれ読み直してみるとそこに一貫した問題意識の流れがあることがわかり、それを貫くテーマが研究の出発点となることがしばしばある。こういった意識化を促すうえでも、簡単にできるメモの活用は予想外の効果を持ちうるものである。

4. リサーチインタレストと研究のスタンス

こういう過程を経て複数のリサーチインタレストが浮かび上がってきた場合、それらを全て研究計画に取り入れたくなりがちである。しかしながら、おもしろそうなトピックを単に組み合わせただけでは整合性のある研究計画になるという保証はない。また、今注目を浴びている A というテーマを最新の a という理論枠組みにあてはめ最先端の α という研究方法で研究しても必ずうまくいくとは限らないのである。

たとえば第二言語習得論の分野では最近「第二言語学習適性」への関心が再燃している。一方、認知言語学の成果を習得研究に援用した多義語の習得の研究も脚光を浴びている。それではこの二つの流行

りのテーマを組み合わせる「多義語習得に学習適性が及ぼす影響」をテーマにすればいい研究になるだろうか。それを判断するためには、

●「第二言語学習適性を研究する素材として多義語は適切か(多義語の習得過程を通じて、学習適性の重要な側面を浮き彫りにすることができるか?)」

または

●「多義語習得研究の切り口として学習適性は有効か(学習適性を変数に加えることにより、多義語習得の重要な側面に光を当てることが可能か?)」

を綿密に検討する必要がある。こういう必然性あるいは整合性がないのに無理矢理複数の要素をくっつけたような研究計画は、やがて破綻をきたす可能性がかなり高いのである。

この点、向山氏の場合は明示的文法説明の効果検証の対象となる言語形式として連体修飾節をとりあげている。その際、なぜ連体修飾節を選んだかについてきちんと理由付け(justification)を行なっていることにご注目いただきたい。そして自分の研究は Focus on Form に関するリサーチクエスチョンに答えを出すために最も適切な方法として連体修飾節を選んだものであり、連体修飾節が主ではないことを明記している。こういったスタンスがはっきりしないと、そのうちに自分が何の研究をしているのか自分でもわからなくなり、なりゆきまかせて次の研究の方向を決める漂流状態にもなりかねない。

もちろん、Focus on Form の研究を進めているうちに次第に対象言語形式の方に興味に移るというような進路転換もありうる話である。妥当な理由があればこういうテーマの転換もあながち否定する必要はない。しかしそれならなおさら適切な舵取りが重要であり、自分の研究の現在の立ち位置(スタンス)をはっきり自覚している必要があるのである。

5. 「失敗」経験を伝える意義

以上の説明からも、向山氏の研究計画が非常によく練られた、完成度の高いものであることをご理解いただけたと思う。

とはいえ、データ収集方法の一部が研究課題に照らして不適切なものであったという反省を、向山氏は率直に述べている。実際、全体としてみれば成功裡に終わり学界から評価を受けた研究プロジェクト(向山氏の修論研究を含む)でも、細部にわたってみれば多くの反省材料が溢れていることは珍しくない。

単なるウツカリミスの類は論外だが、「計画段階では最善の選択をしたつもりだったが、研究がひととおり終わってからはじめて、よりよい選択肢があったことに気づいた」というのはおそらく多くの研究者が一度は経験している「秘史」である。

新奇な研究領域に足を踏み入れた場合には、かなりのベテラン研究者でもこういった経験を免れないものである。むしろそういった失敗を次回に活かすことによって、個人も集団も次の飛躍が期待できるといえる(畑村 2005)。研究者としての確かな成長をもたらした向山氏の「失敗」はいわば戦士の負った「向こう傷」であり、果敢に敵陣に斬り込んだ証としてむしろ肯定的にとらえるべきだろう。

6. 結語

残念なことに、こういった研究者自身の内観にもとづく研究過程(ことに意志決定の道筋や「失敗」の経緯)の記録は、少なくとも応用言語学の分野では今のところ乏しい。今後こういった資料をさらに蓄積することによりノウハウの共有化が図られ、若手研究者の研究能力向上に資するものと期待される。

注

1. この問題については、宍倉由高氏(ナカニシヤ出版)との交信を通じて考えを深めることができた。

参考文献

畑村洋太郎 (2005)『失敗学のすすめ』講談社

ささき よしのり／お茶の水女子大学

sasaki.yoshinori@ocha.ac.jp